２０２４年０７月２５日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２４頁

寂聴が読む「道子」像

文人の武蔵野

大岡昇平 ⑬

大岡昇平は小説「武蔵野夫人」（1950年）の執筆に際して「勉」を主人公と考えました。「勉」は武蔵野が大好きで、読者を武蔵野に導く役割を果たす人物です。

「武蔵野夫人」を読んだ評論家・劇作家の福田恆存は、（大岡自身に近い存在である）「秋山」を主人公にして私小説にした方がよかったのではないかと指摘しました。同作を読んで51年に映画化した溝口健二監督は「道子」を主人公と解しました。映画「武蔵野夫人」の製作で「潤色」を担当したのは福田でした。

映画化と同年に戯曲化も託された福田は、「勉」の台詞に「自由」の観念を与えて劇場の主人公にしてみせました。福田に言わせるなら、「勉」を主人公にするのに足りないものをみずから付与したということになるのでしょうか。

前田愛との対談の中で「武蔵野夫人」への思いを語った瀬戸内晴美（寂聴）

それから30年以上経ち、作家で僧侶の瀬戸内晴美（寂聴）が文学研究者の前田愛とのある対談の中で、舞台となる恋ヶ窪、野川などの武蔵野を歩きながら、小説、映画、芝居としての「武蔵野夫人」を振り返っています。前田と瀬戸内とでは、特に後半の読み方において異なるところがあります。

瀬戸内は、「武蔵野夫人」の中心の主人公を道子ととらえました。そして、一番幸せなのは自殺した道子ではないか、という考えを述べています。それを受けて前田は、否定はしないものの、なぜ道子は哀れに死ななければならなかったのか、という問いを示します。

道子は勉に有利なように遺言を書いて服毒するのですが、うわごとの中で勉に対して泣き叫び、それまで言えなかった本当の心の内をぶつけています。心が愛する人の名を呼び、甘い言葉を自由に発しており、そこに瀬戸内は女の幸福をみています。

前田は、大江健三郎が道子は不感症ではないかと大岡に言って大岡がその通りだと答えたというエピソードを持ち出し、「はけ」の女である道子が不感症だったと知り残酷だなという思いが捨てきれない、と漏らします。瀬戸内は反論し、夫である秋山に対して不感症だっただけではないか、本文からも道子が不感症の女だと読むことはできない、とします。

瀬戸内はまた、肉体的に夫を裏切らなかった道子を貞淑な女だとは思わない、とも述べています。瀬戸内の読み方に基づくなら、大江や前田や大岡らが世間に示してきた道子像が少し変わるはずです。道子が勉の肉体を拒んで守ったものは何だったのでしょうか。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。